

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 13 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01857

研究課題名(和文)重要成功要因が組織文化として定着する組織的プロセスの研究

研究課題名(英文) Research on the organizational process by which key success factors become entrenched as organizational culture

研究代表者

高橋 伸夫 (Takahashi, Nobuo)

東京理科大学・経営学部経営学科・教授

研究者番号：30171507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：この研究計画では、まず、組織文化が組織構成員の勤続年数とともに変化していくコーホート効果を見通し指数のデータで明らかにし、組織学会で報告し、学会誌等に発表した。また旧国鉄の経営破綻及び分割民営化後のJR東日本の事例を経営史的に組織文化の定着プロセスとして迫ろうとした研究成果は、鉄道史学会で報告し、学会誌等に発表した。

コロナ禍ではアプローチを変え、テレワークが現実になる中で、1990年頃の日本で注目された同様のマルチハビテーションの教訓が組織文化として定着しなかった経緯について学会誌に発表した。また、ゴミ箱モデルで「やり過ぎ」と呼ばれる現象の定着についての論文も発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

調査当時、横断的調査では調査対象企業の重要成功要因だと思われていたことが、10年、20年たっても重要成功要因であり続けるのか。そのことを手元に蓄積されている毎年繰り返し行われてきた横断的調査の大量の研究資料を基にして、さらに新しい調査も追加して分析した。その結果、ある程度は、長期間価値を持ち続けており、組織文化のようなものに変容していったと考えられたが、その一方で、コーホート効果のようなものも観察され、経験した当時の従業員に内在化していたのではないかと考えられた。こうした研究成果は、企業における重要成功要因の定着や、好ましい組織文化への変容にとって、大いにヒントになると考えられる。

研究成果の概要(英文)： In this research project, I first clarified the cohort effect of changes in organizational culture with the length of service of organizational members, using data from the perspective index, and reported the results in the Organization Studies Association and published them in the journal of the association. In addition, the results of a study of JR East after the bankruptcy of the former Japanese National Railways and the privatization of the company were reported at the Railway History Society of Japan and published in the journal of the society.

In the Corona Disaster, I changed the approach and published a paper in an academic journal on how a similar multi-habitation lesson that attracted attention in Japan around 1990 did not take root as an organizational culture while teleworking became a reality. I also published a paper on the entrenchment of a phenomenon known as "yarisugoshi" in the garbage can model.

研究分野：経営学

キーワード：重要成功要因 見通し指数 コーホート効果 国鉄経営破綻 テレワーク マルチハビテーション ゴミ箱モデル やり過ぎ

1. 研究開始当初の背景

企業や組織を長期間に時系列的・定期的に観察・分析することで横断的調査では見えなかった事実が分かってくる。たとえば、高橋他(2013)「組織の打診調査法」『組織科学』は、組織再編を挟んで約10年定期的かつ継続的に全数調査してきたデータを分析することで、横断的調査のデータで見えていた相関が疑似相関であったことを明らかにしている。その際、「見通し」と職務満足との間の相関と対照させることで、疑似性が一目瞭然となった。このように、海外研究の追試をする際でも、もともと日本で使われていた大和言葉の概念・変数 - 「見通し」の他にも「やり過ぎし」「ぬるま湯」等 - と対照させながら時系列的に分析することが重要である。幸い手元には、過去30年以上にわたって繰り返し行われてきた横断的調査の研究資料が大量に電子化されて蓄積されている。

2. 研究の目的

調査当時、横断的調査では調査対象企業の重要成功要因だと思われていたことは、10年、20年たっても重要成功要因であり続けるのか。そのことを、データをもとにして確認することを目的としていた。

3. 研究の方法

この研究計画は、手元に蓄積されている過去30年以上にわたって、毎年繰り返し行われてきた横断的調査の大量の研究資料を基にして、さらに新しいデータも追加して、重要成功要因が一過性のものであったのか、それとも長期間価値を持ち続けて、組織文化のようなものに変容していったのかどうかを明らかにした。

4. 研究成果

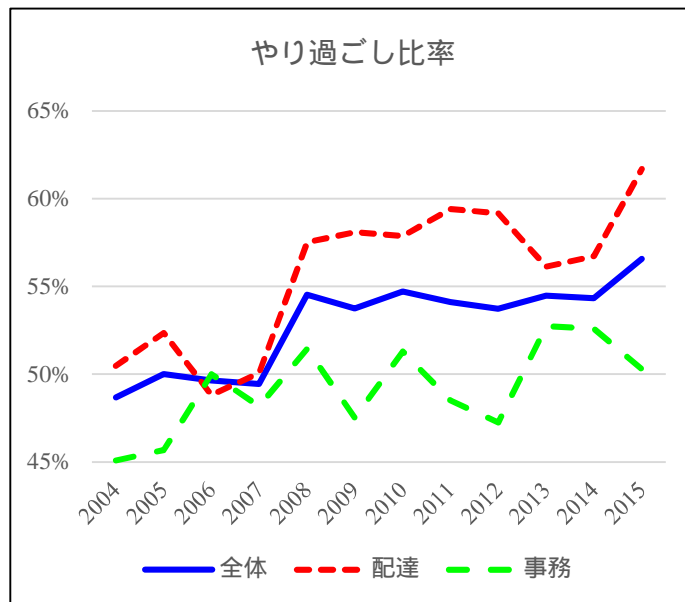
この研究計画は、重要成功要因が組織文化として定着する組織的プロセスを研究するものである。その中で、組織文化が組織構成員の勤続年数とともに変化していくコーホート効果を見通し指数のデータで明らかにし、2019年の組織学会年次大会で報告し、同年同学会の『トランザクションズ』誌に発表した。2020年にはその詳細を別のデータも加えて『赤門マネジメント・レビュー』誌で発表した。

旧国鉄の経営破綻及び分割民営化後のJR東日本の事例を経営史的に組織文化の定着プロセスとして迫ろうとした研究成果は、2019年度に鉄道史学会で報告し、2020年には『鉄道史学』に掲載された。これから派生した、国鉄の破綻理由についての論考は2019年に英文誌 Annals of Business Administrative Science (ABAS)に掲載された。

2020年～2021年はコロナ禍で、苦しい研究活動を強いられた。そんな中、組織プロセスの研究に使えるコンピュータ・シミュレーションの可能性についての考察を英文論文にまとめて2020年にABASに発表した。さらに日本における組織のシミュレーション研究の歴史を2020年に『赤門マネジメント・レビュー』に発表した。また、コロナ禍でテレワークが現実になる中で、1990年頃の日本で注目された同様のマルチタビテーションの教訓が組織文化として定着しなかった経緯について2021年に英文誌 ABAS に発表した。

コロナ禍が明けた 2022 年度は企業の事例研究を行い、脱炭素時代を生き残るガソリンスタンドの創発的戦略についての英文論文を 2022 年に ABAS に発表した。2023 年度はまとめの年であり、ゴミ箱モデルで decision making by flight が発生する状況から見出された「やり過ぎ」と呼ばれる現象の定着についての英文論文を ABAS に発表した。

そこで、「やり過ぎ」に関する新しい知見を一つ紹介しておこう。12 年間にわたって全数調査してきた X 社のデータを改めて長期的に分析したところ、やり過ぎ比率の推移について面白いことが分かった。まず、X 社全体では 49% ~ 57% で推移していたのだが、配達部門は 49% ~ 62% で推移し、事務部門は 45% ~ 53% でそれよりも低かった。そして右のグラフからもわかるように、この X 社の場合、途中の 2008 年で、やり過ぎ比率が全社で 5%ポイントほど、配達部門で 8%ポイントほどボンと階段のステップを上げるように跳ね上がっていたのである。



その原因について、改めて調査したところ、その年、コンビニ配送が始まって、従業員数の過半を占める配達部門が忙しくなっていたことが分かった。したがって、事務部門にはそんな傾向は見られなかった。実は、負荷が増えると「やり過ぎ」が増えるという傾向は、*Human Relations* 誌で発表された Takahashi (1997) で、コンピュータ・シミュレーションの結果として既に予想されていたことだったが、その予想通りだということが検証されたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 Takahashi, Nobuo	4. 巻 21
2. 論文標題 Emergent strategies for gas stations to survive in a carbon neutral age: The challenge of Yamahiro	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7880/abas.0220204a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 30
2. 論文標題 JQA表彰推薦理由の変遷について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アセッサージャーナル	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 445
2. 論文標題 ぬるま湯の不都合な真実	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JR経営情報	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Takahashi Nobuo	4. 巻 20
2. 論文標題 Telework and multi-office	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 107～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7880/abas.0210705a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 1
2. 論文標題 脱炭素時代を生き残るガソリンスタンドの創発的戦略	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Jxiv	6. 最初と最後の頁 1~13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51094/jxiv.12	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 1
2. 論文標題 研修は内部監査研究の対象になり得るか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 内部監査	6. 最初と最後の頁 40~42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takahashi Nobuo	4. 巻 19
2. 論文標題 Simulation and organizational studies in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 45~65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7880/abas.0200227a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 80(6)
2. 論文標題 企業統治と経営者	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 運輸と経済	6. 最初と最後の頁 101~105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 伸夫	4. 巻 19
2. 論文標題 日本における組織のシミュレーション研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 赤門マネジメント・レビュー	6. 最初と最後の頁 77～98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14955/amr.0200515a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kuwashima Kenichi, Inamizu Nobuyuki, Takahashi Nobuo	4. 巻 19
2. 論文標題 In search of ambidexterity	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 127～142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7880/abas.0200621a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋 伸夫	4. 巻 19
2. 論文標題 見通し指数に関する因果関係とコーホート効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 赤門マネジメント・レビュー	6. 最初と最後の頁 139～157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14955/amr.0201005a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 38
2. 論文標題 日本国有鉄道の成立(1949～1987年)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鉄道史学	6. 最初と最後の頁 79～81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takahashi, Nobuo	4. 巻 18(6)
2. 論文標題 Japanese National Railways' financing schemes and bankruptcy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 263-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7880/abas.0191117a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋伸夫	4. 巻 8(2)
2. 論文標題 見通し指数の長期的定点観測	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 組織学会大会論文集(トランザクションズ)	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11207/taaos.8.2_7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takahashi, Nobuo	4. 巻 19(2)
2. 論文標題 Simulation and organizational studies in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 45-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7880/abas.0200227a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 3件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高橋伸夫
2. 発表標題 組織のシミュレーションの可能性
3. 学会等名 組織学会九州支部・研究・イノベーション学会九州・中国支部(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋伸夫
2. 発表標題 日本国有鉄道の成立：国鉄誕生から民営化前後までの会計と資金調達
3. 学会等名 鉄道史学会 第37回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋伸夫
2. 発表標題 見通し指数の長期的定点観測：組織における長期的定点観測のススメ
3. 学会等名 組織学会60周年記念年次大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高橋 伸夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新世社	5. 総ページ数 200
3. 書名 コア・テキスト 経営学キーワード	

1. 著者名 高橋 伸夫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新世社	5. 総ページ数 328
3. 書名 コア・テキスト 経営学入門 第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------